

土のこえ

中山間の
小さな農地への想い。
長野県富士見町御射山神戸地区



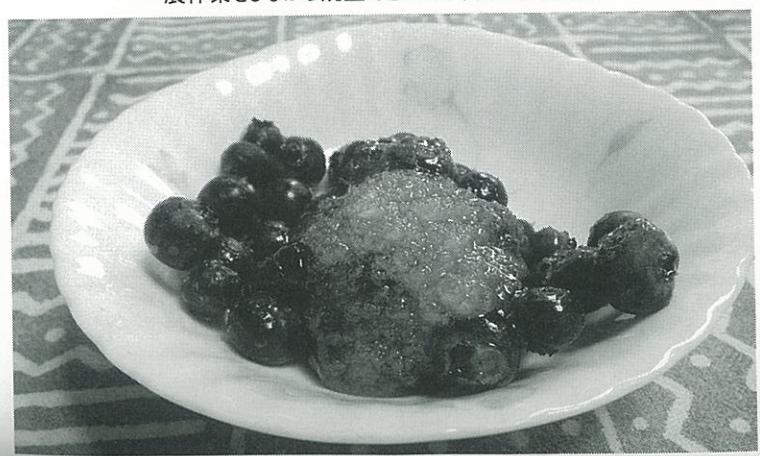
耕作放棄地から生まれ変わった農地が広がる(写真奥は八ヶ岳連峰)



農作業をしながら眺望できる八ヶ岳連峰の絶景



「御射里の会」によって飼育されている羊



自家製の蜂蜜をかけたブルーベリー



捕獲したシカの解体作業

「昔

は貸した農地が返してもらえない不安があったけど、今は貸した農地が返ってくる不安がね・・・。御射山神戸地区で、自らが所有する農地以外にも高齢で担い手がない世帯の農地を借り受けるUターンのKH氏は、貸し手の気持ちをこのように代弁する。

長

野県富士見町の北西部に位置する御射山神戸地区。その西側には入笠山を背景に約20haもの傾斜農地が広がる。圃場整備は入っておらず、鳥獣被害にも悩む。この地で、地元の住民組織『御射里の会』による羊飼育、I・Uターン者によるソバやブルーベリー栽培など、新たな試みが実を結び、この10年間で多くの耕作放棄地が解消された。そして、八ヶ岳連峰を遠景とした健全な田園風景を取り戻しつつある。

し

かし、多くの農地を借り受け、こうした変化を興してきた主役の大半は“年金受給世代”。

この先10年、15年後の将来に不安を抱える。

IターンのS氏は、同じIターン者のO氏について言う。「毎年、毎年（農地を）増やしているからすごい。70までは頑張ると言うのだけれど、でも70になるまであと7年。あと7年経ってOさんが退いてしまったらあそこはどうなるのだろう・・・。」

こ

れに対し、O氏は自らの後継者問題とも重ね合わせながら退職者世代への期待を口にする。

「（農業で）食べていけないから、若い人たちが（ここで）農業やるのは難しい。我々のように退職した人達、退職してどうにか生活できるという中で、この自然や農地を残していくというね。皆が1反か2反ずつやれば、いいと思うんだけれど。平均寿命が80幾つといっている中で、例えば60あるいは65で退職したとしてあと15年くらいあるでしょ。」

「戸

別補償もらったからって、別にそれで生活できるとかいうわけじゃない。けど、小遣い銭ができる。孫が来たときにあげるとか、誰か人が来た時にちょっととか。張り合いが出る。」と同氏は続ける。

一

方、長年にわたり地元で農業を営んできたKS氏は、後継者である息子の定年まであと10年。何とかそれまではと頑張っているが、「会社とかに勤めていると、休みの日は休みたいもんね。それを農業の方やってくれなんて言えないじゃんね。日曜日は日曜日と思うから。やっぱり今はあてにできないね。」と言う。

そ

して、「（耕作放棄地で）雑草の花が咲いて実がなると、それが風に舞って周りで耕作している人に迷惑をかけてしまう。獣の潜み場にもなる。せめて管理だけは・・・。」という地元農家の共通の想い。

昨

年10月、農林水産省は『我が国の食と農林漁業の再生のための基本方針・行動計画』の中で、中山間地域でも10～20haの経営体が大宗を占める構造を目指すと発表した。これに関して、ある氏は語る。「国は今、細かい農地を1つにしたいというね。それで、1人にしてやらせたいという考え方を持っているようだな。けど、そこでやつていけるのは、わずかな人間だよな。確かにそこに農地は残るけれども。俺は里山を残して、日本の地形から言えば、こういう所を残していくというのも大事だなと思う。」

10

年間、燈し続けてきた一人一人の想いの“灯”を絶やさないために、残された時間は長くはない。

中島正裕